

比較研究の効用^{すすめ}

The Use of Comparative Method in Political Thought;
Significance and Prospect of this Approach.

田中 浩
Tanaka Hiroshi

思想史という学問を始めてからかれこれ三十数年余になる。成果のほどは措い^おといて、近年はともかく楽しく研究させていただいている。

最初の十年余りは17世紀市民革命期のイギリス、次の十年間程は192・30年代のヴァイマル共和国の崩壊過程からナチ体制成立期のドイツ、そしてこの十年ばかりは幕末・開国・維新期から大正デモクラシーの時代あたりの近代日本の思想の形成・変容過程に重点をおいて研究を続け、気がついてみたらいつしか近代三百年にわたる英・独・日の比較政治思想という研究スタイルになっていた。もっとも、それぞれの十年間を明確に区分して、一つがある程度済んだらハイそれでおしまいという清算主義的なやり方をしてきたわけではなく、1プラス2プラス3という具合に相互に補完させ合いながら対象領域を漸次拡大しつつ社会認識を深化させていくという方法をとってきたつもりである。このような「相互乗入れ型」研究スタイルになったのは、それぞれの研究開始時点における私自身の問題関心の移行に伴ったものである。

そもそも、イギリス思想研究のルーツは、敗戦直後、日本民主化の波が最も高揚した時期に過ぎた旧制高校時代に、職業軍人の卵から脱却するために悪戦苦闘し、J・S・ミル、T・H・グリーン、H・ラスキなどイギリス自由主義の思想にその転回の契機を求めたことに始まる。当時、高校生

の間では、一方では依然として西田哲学やドイツ哲学が教養の原点とされ、他方ではマルクス主義が最新流行の思想として一世風靡していたが、どういうわけか私は、なにごとについても経験を重んじ、いわば合理的・理性的な「醒めた眼」でものごとを見つめ、しかもその根底において個人の確立や人間の自由を尊重するイギリス思想に強く惹かれていった。イギリス思想の本質は、人間の強さも弱さも含めて、あるいはその虚と実をも認めた上で社会正義と幸福追求の実現を求める道徳哲学に始まり、スミスやベンサムを読んでもわかるように、法・政治学、経済学などの実学へと進んでいくところにある。一見、ひからびて冷たく見える社会科学や社会理論も、そこでは人間に対する配慮・関心が中心を占めていることによって誰でもが接近できるものとなっている。社会科学を学ぶ前提としてはまず「哲学」研究からと考えて大学では哲学を専攻することにした。

ところで、戦後すぐの日本の「官立」大学——旧制時代には「私立」大学と対比してその優越性を誇称する名称として「官立」なる語が用いられたが現在では空語となった——では依然としてドイツ哲学が哲学科の主流を占めていた。しかし、私は戦後日本の民主化を考えるさいには、世界に魁けて近代国家や市民社会のモデルを自立的に形成したイギリス思想の研究から始めるべきだと考えて近代的人間像の定礎者トマス・ホッブズを研究対象に選んだ。これは当時あっては、やや大げさに言えば、エスタブリッシュメントに対する逆行行為であり危険な冒険とさえいえ、事実、先輩たちからは形而上学やドイツ観念論の研究を先にすべきだとの勧告やアドバイスを受けた。考えてみると、当時は結構「学問外的強制」によって「研究の自由」も窮屈であったように思える。このとき私に勇気を与えてくれたのは、東京商科大学（現一橋大学）の故太田可夫教授や名古屋大学の水田洋助教授（当時）のホッブズに関するすぐれた著書・論稿であった。こうして、「ホッブズ自然法理論におけるエピクルス的性格」というタイトルだけは立派そうに見える卒論をなんとか仕上げた。この論文は、伝統的自然法思想を近代的自然法へと転回させて近代国家論を最初に構築したホッブズの場合、そのコペルニクスの理論転換にさいして古代唯物論哲学がいかに大きな作用を与えたかを追求したものであった。いまにして思えば、そのときは無意識的であったが、すでに比較思想史的方法を採用していたことになる。卒業後は法学部か経済学部で学士入学してよいよ本格的に社会科学を研究するつもりでその手続を進めていたら、新設の政治学科の専任助手にどうかという話が突然舞い込み、「お手当付き」でしかも念願の政治思想史研究ができるというので、直ちにこれに飛びついた。

哲学からいきなり政治学へ転進したこともあって、2年間ほど岡義武教授の下で政治学の基礎的手ほどきを受け、この間に多数の若手政治学^{かん}の俊秀たち——今は各大学の長老教授となっているが——と切磋琢磨することができた。さて、ホッブズの政治思想研究を始めたが、かれの主権（国家）論つまりそこにおける「権力」と「自由」をめぐる関係が、ホッブズの著作だけを読んでいてもどうもよくわからない。結局この難問を解くためには市民革命前の数世紀間にわたるイギリスの政治状況、国家・政治制度の発展、政治思想の系譜などを検討する必要があることを痛感した。こうして私は、一方では13世紀のマグナ＝カルタ附近から17世紀中葉に至る約四世紀間のイギリス政治史や憲法闘争、イギリス人の抱く制度観（国王観・議会観）、あるいは「法の支配」思想などの研究を、他方ではホッブズと同時代のハリントン、ハント、ミルトン、フィルマー、ジェームズ一世、シドニー、ロック等々の政治思想との比較研究へと次々にその研究領域を拡げていくことになる。そして、歴史状況との関連を基礎に政治思想を研究したこと、さらには同時代史的な比較思想研究をそれに組み込んだことによって、ようやくホッブズ政治思想の持つ意味

やその思想的な位置付けがある程度見えてくるようになった。またこうした基礎的研究の副産物としては、ホブズ以後のペイン、パーク、スミス、ベンサム、ミル、スペンサー、グリーン、ダイシー、ラスキなどに至る近代イギリス民主主義思想史の発展と変容についての理解を容易にしたこと、さらには歴史研究を手がけたことによって西洋史研究者とはもとよりのこと、日本・東洋の歴史研究者、社会経済史・社会思想などの多数の若手研究者との交流が深まる好運に恵まれた。時間はかかったが、縦(時間と歴史)と横(空間と現在)にまたがって次々に思想をブリッジしていく比較研究を行なったことは、私にとって、事物を相対化して見る眼を養わせ、とかく「タコつば的」研究に埋没したり、あるいは「イデオロギッシュな」もの見方によって一方に偏しがちな誤ちに陥いることを防止してくれたように思える。これも比較研究の効用の一つに数えてよいだろう。

ところで、1960年代後半に、私の思想研究に大きな転機がおとずれた。要因は全く別々の形で襲いかかってきた。一つは、本来、理性的・合理的研究・教育の場であるべき「大学の庭」に「移転問題」を契機にして、そのプロセスや内容について批判もしくは反対する者に対して、人事昇進や海外留学などの面から大学評議会がこれを力で妨害するというまことに非合理的な事態が発生したこと、もう一つは戦後民主主義は虚妄なりとしてそれに疑問を呈するいわゆる「大学闘争」の波が全世界的・全日本的規模でわき上ったこと、この二つの要因が私に非合理的思考研究の重要性と必要性を痛感させた。

それまでの私は、主として人間は本来合理的・理性的・等質的であるという人間像を中心とする古典的イギリス政治社会思想によって政治や社会を見てきていた。それは、非合理的な「矛盾」を克服して理性的な「正常事態」を実現することを民主主義の目的とみなす思想的立場である。この「正常化プロセス信仰」に突如、「異常事態」や「例外状態」という異質な政治的なるものが飛び込んできたのである。そうした思想状況にどう対応すればよいのか。この問題は思想研究に従事する者にとっては死活問題にもなりかねないほどの重要問題に思えた。こうして私はそれまで手をふれることさえ嫌ってきたヴァイマル期ドイツ保守支配層のイデオログ、またその政治理論によって結局はナチズム体制成立への道を掃き清めたドイツの政治・公法学者カール・シュミットの研究に足を踏み入れることになった。かれこそは、「例外状態論」・「危機状態論」をキー・コンセプトとして、ヴァイマル共和国時代の正常な議会運営を破壊する理論を展開し、ついには大統領独裁論を構築した非合理主義的政治哲学のチャンピオンであったからである。多彩・多作なシュミットの著作を読破した効果は三点あげられる。一つは、スミス・ペイン・ベンサム対ヘーゲルに始まる近代思想の二大潮流、すなわちイギリス思想とドイツ思想の相克・葛藤の諸相と民主政治の不均衡発展における思想的ダイナミズム把握の問題を考える契機を与えられた点、換言すれば、現代思想理解のためには、少なくともイギリス思想とドイツ思想との比較研究が必要であろう、ということである。第二点は、第一の点と関係があるが、近代国家成立時に近代自然(権)法思想や社会契約説をめぐる徹底的な論争を行なったイギリス、アメリカ、フランスと異なり、それを血肉化しえなかったドイツ・日本のような国々では民主主義がある程度発展していた20世紀においてすらファシズムの妖怪を生みだす結果になった経緯を学んだことである。と同時に、第一次大戦直後のドイツにおいてE・トレルチが鋭く指摘しているように、改めて民主主義思想に関する古典研究の重要性を認識させられたのである。第三に、政治学プロパーの問題でいえば、「政治の世界」においては、つねに「正常」と「異常」の両側面から分析する必要のあることを学んだ点である。考えてみれば、ホブズやルソーやマルクスなどは、このことを十

分に承知してかれらの理論を展開していたのである。ホップズ研究者が何故シュミット研究をと当時、非難めいて疑問視されたこともあったが、反面教師的にシュミットから学んだ収穫は予想外に大きかったといわざるをえない。

さて、日本研究へのかかわりは全く偶然的なことから始まった。1960年代の前任校東京教育大学は日本史・日本思想研究のメッカであった。稲田正次（憲法）教授を代表とし、家永三郎、穂積重行、津田秀夫、暉峻衆三、松本三之介、大江志乃夫氏らをメンバーとする総合研究「明治国家形成過程の研究」が通った。一番下っ端の私が事務局を担当させられた。2年間の研究期間が終了し、いよいよ成果の刊行ということになった。十数名のメンバーの中で穂積氏と私だけが西洋研究者で当然に執筆から免除されるものと勝手に決めこんでいた。しかし、そうは問屋がおろさなかった。何しろ日本研究はズブの素人である。大あわてであれこれ明治期の思想家や政治指導者たちの著作を読み漁り、タイム・リミットと能力を考えて加藤弘之に的をしばった。これが私の日本研究「事始め」である。

加藤は明治初年には社会契約論張りの近代国家論を展開して福沢諭吉と並ぶ啓蒙期知識人の代表者と目されたが、明治10年以降には、19世紀後半の西欧思想である社会進化論を用いて社会契約説を叩き、自由民権運動に冷水を浴びせた近代日本における最初の政治的保守主義者（日本のバーク）である。社会契約思想はある程度おさえてあるので、あとは社会進化論の政治的・社会的機能と日本の政治・思想状況をおさえれば何とか逃げ切れると考え二年間ほどこれに没頭した。この研究を通じてわかったことは、19世紀後半全体にわたって社会進化論が全世界的に大流行し、それは元祖スペンサーのイギリスはもちろんのこと、米・独・中・日などにおいてもきわめて大きな影響力を与えたこと、たとえば、あるときは資本家階級のイデオロギー（競争による進歩）として（米）、あるときは民族独立・帝国主義反対の思想として（清国、インドネシア）、またドイツでは国家有機体説を補強するものとして、日本では加藤のような近代的よそおいをつけた国家主義思想として変身させられたことなどが明らかとなった。そして本家イギリスでは、19世紀後半における世界史的課題つまり自由主義に対する社会主義の挑戦にどう答えるかという大問題をめぐってこの思想が提起されていたことなどもわかった。この点についての詳細は紙数の関係で述べないが、以上に述べたような「スペンサーもびっくり」というほどの社会進化論の多様な政治的機能の拡散をみながら、私は日本における西欧思想の受容の仕方に二度びっくりしつつ、ようやく「明治前期におけるヨーロッパ政治思想の受容状況」（御茶の水書房）という論文を書き上げた。この西欧思想の受容というテーマ設定は恐らく戦後はじめての試みであつたらしく、このような稚劣な論文でさえ日本思想史研究者の間で興味を持たれ、以後この種のスタイルの研究がぼつぼつと現われるようになる。

ところで、これだけであつたら恐らく私は日本研究などにそれ以上踏み込まなかつたであろう。「学災は忘れた頃にやってくる」。1972年頃であつたらうか。日本政治学会の『年報』で、「日本における西洋政治思想」（年報委員長石田雄）というまさに受容の問題そのものずばりともいふべきテーマが企画され、そこに引き込まれた。編集者からはスペンサーの受容の問題を深めよという要望があつた。しかし、当時すでに私の関心は192・30年代のシュミットに集中していた。そこで私は、シュミット、ラスキと対比できる日本の思想家を取り上げることができるならばという条件で、あれこれ検討した末、大正デモクラシー期のオピニオン・リーダーで、「日本のラスキ」と呼ばれた大ジャーナリストの長谷川如是閑を選んだ。そして、かれの思想の中核がイギリス自由主義の伝統と新しい「社会的」（社会主義的要請を加味したもの）民主主義を接合した20世紀の

新思想の流れをくむものであること、またそれに基づいて如是閑が国家主義やファシズムに抵抗しえた事情を「長谷川如是閑の国家観——同時代史的考察——」（岩波書店）というタイトルで書き上げた。当時、如是閑の研究は一、二の論文を除きほとんど皆無に近かったし、またかれの全体像を網羅した論文もなかったので、随分と苦勞して取り組んだことを思いだす。

如是閑の研究を通じて、私はますます民主主義思想の形成・発展史上におけるイギリス思想の重要性を実感しえたし、また如是閑が、戦前日本の思想と歴史を「イギリス思想」と「ドイツ思想」の対抗として捉え、結局、イギリス思想が敗北したプロセスとして画く手法に共感をおぼえるようになった。そうした関心から、私は現在、近代日本の思想を、リベラリズム、^{ステイティズム}国家主義、社会主義の三つの思想的側面から捉え直してみたいと考え、そのためにも、開国・維新期における福沢や加藤らの^{ネーション・ビルディング}国家構想の違い、あるいは明治2・30年代の日本主義者・陸羯南や「日本のアダム・スミス」・田口卯吉らの自由国民主義による富国強兵策・藩閥政府批判、大正デモクラシー期の政治・社会思想の諸相などを明らかにする作業を進めている。こうしたわけで、当分の間、私は日本思想研究と縁が切れそうにない状況にある。実は第4ラウンドとして現代国民国家の比較研究というテーマを考えているのだが、それに取り掛かれるのはいつのことだろうか。

紙数も盡きた。最後に比較研究の効用について一言すれば、たとえ現代世界の研究をするにしても、少なくとも近代以降の思想と歴史の研究を抜きにしてはとういて現代世界の諸相を深みのあるものとして捉えることはできないであろう、ということである。その意味で古典研究は、決して現代離れした迂遠な問題ではなく、社会科学の研究者にとって無限の指針を与える「理論の宝庫」であるといえよう。

（一橋大学社会学部教授）